

7・24地域^{みんな}で支え合うこれからの福祉 i n i t a m i 取り組みを終えて

西浜利之
伊丹労協

2005年7月24日、日曜の午後・・・猛暑にも関わらず開演30分前には、伊丹市立文化会館の大ホールに、伊丹市内外から福祉事業に携わる介護関係者を中心に地域の若者から高齢者、障害を持つ人々まで1000名近い人が会場に足を運んだ。場内にベルが鳴動しざわめきが徐々にひとりひとりの胸に吸収され、司会者の主旨説明の後、「地域の人々が、心で集い、支えあってひとつの大きな家族となるように」と大会実行委員会会長の正賀スミさんが挨拶。

伊丹労協が2001年度より目指してきた・・・協同労働を通じ伊丹市全体をひとつの家、家族としてとらえ大きな一つの屋根の下に集い、語り、心豊かな「協同・共生」の地域福祉社会を創造しようとする目的と符合し、「協同」の小波が大きくなうねりへと変遷する機運を感じた。

本大会の取り組みは、2003年12月、兵庫県姫路市内で開催された福祉ジャーナリストの村田幸子さんの講演会に参加した伊丹労協のケアマネに端を発する。「介護保険制度で変わった高齢者の暮らし・・・」と題し、措置制度時代と比して利用者意識が変わり、介護現場で働く人々一人一人がより良いケアをするには豊かな心を持ち、介護の社会だけでなく映画や音楽、絵画、読書などさまざまな社会を知っておくこと。ひとりひとりの利用者が持っている世界や器の大きさに合わせられるだけの器を自分も持つこと。など介護者向けにわかりやすく、心洗われる話しにケアマネが感銘を受け、「伊丹に来ていただけますか？」との呼びかけに「行くわよ」と快く引き受けてくれた。

登壇直後、村田さんが「客席の照明を少し明るくしてください、皆さんの顔が見えないから・・・」の言葉がひとりひとりに丁寧な話しかけようとし、「聴く人の心」を表情からつかもうとする姿勢が伺え、会場全体が何ともいえない暖かさに包まれた。今回は、介護者を含め地域住民向けに利用者、あるいは市民の立場から、これからの福祉は社会の「生き難くさ」を地域住民が行政と共に考え、住民同士が支え合い、行動を起こし解消にあたる・・・このような「市民力」が住みよい地域創りに大きな役割を果たしていくだろうと・・・筆者は受けとめた。また、元伊丹市企画調整室主幹で現厚生労働省障害保健福祉部企画官の伊原和人さんは、介護保険制度の見直しや、障害者

福祉施策など福祉の総合的な情勢について報告された。

伊丹労協のヘルプ協会が中心となり市の協力を得、社会福祉協議会や市内の社会福祉法人、医療法人、福祉機器のレンタル会社や有料老人ホームなどに呼びかけたのが1年前である。狭い地域に競合するように立ち上がってきた、訪問介護事業所から、ヘルパー、サービス提供責任者や経営者まで19団体がその準備に携わり56団体の協賛広告をとりつけた。普段、利害関係が異なる事業者どうし、不慣れな実行委員会形式で事が運ぶのかと不安を抱えて15名前後の人数で第1回実行委員会を開催。・・予感的中。誰が、あるいはどこがこの実行委員会の要となるのか、何をどのようにするのかなど「誰かがやるやる」状態でスタート。やがて大会委員長や事務局長等の要が決まり実行委員会の中ほどで施設系や通所系、訪問系、居宅介護と4つの分科会が設定された。具体性が見えてくるとそれぞれは専門職の集団。実行委員会の後半では、それに参加する人の数が倍近くまで増え、この時点で本大会成功の確信が持てるようになった。また、伊丹労協の取り組みにも拍車がかかり、「さらなる共生福祉社会への船出、1人が1人の手を取り会場へ！」とスローガンを掲げ、当日の動員数の約半数が大ホールの席を埋めた。

特筆すべきは、これまで事業者間では施設長会やケアマネ会、あるいは看護師どうしの情報交換の場は設定されていたが、訪問介護事業者の管理者やサービス提供責任者等のネットワークがなく本大会の分科会を通じ、その流れの中で14～5の団体が大会終了後も定期的に集い、ケースカンファレンスや介護者が抱える課題等の情報交換の場へと広がりを見せた。

今後、現場の最前線で働く人々の課題の整備や制度上の問題提起を行い「生き難さ」の改善を地域住民の参画で「協同と共生」の名のもとで深く、広く浸透することをせつに希う。

